

「こども環境管理士」資格を活かすための授業の改善・工夫：アクティブ・ラーニングの導入を目指して

著者	菊地 達夫
雑誌名	北翔大学短期大学部研究紀要
巻	54
ページ	41-52
発行年	2016
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002093/

「こども環境管理士」資格を活かすための授業の改善・工夫 —— アクティブ・ラーニングの導入を目指して ——

Ingenuity and Improvement of Teaching in order to Take Advantage
of the “Children's Environmental Management Officer” Qualification

菊 地 達 夫

Tatsuo KIKUCHI

I は じ め に

現在、保育者や小学校教員養成課程を有する高等教育機関では、主免許資格（小学校教諭／幼稚園教諭，保育士）に加え，その他の関連資格（以下，資格）の取得を促すことが少なくなっている。その場合，資格取得に関連する授業を教育課程に組み入れたり，対策講座を実施したりする。資格取得の目的は，主免許資格に付加価値を与え，質の高い保育・教育活動に活かされることを期待している。資格の保持は，特定分野の知識や技能を有することの証明となる。

一方，資格の取得が，養成校における学生募集（入学前情報）の特色づくりに利用されることがある。こうした場合，特定分野の知識・技能が，授業内容や目指す仕事に，どのように結び付くのか，わかりにくいことが多い。

よって，資格の取得はもちろんその学習が，どのように授業内容や仕事へ役立つのか，もっと重視される必要がある。資格の取得は，あくまで通過点に過ぎないという認識が大切である。すなわち，主免許資格に加え，どのような特色ある学習活動をしてきたか，という視点へ意識を向けさせたい。

ところで，保育者・小学校教員養成課程における資格の在り方に注目した先行研究は，あまりない。例えば，渡（2015）では，養成校の学生が受験した保育英語検定の結果を分析した。また，鈴木（2012）では，保育者養成課程における保育英語検定の導入の意義を強調している。具体的には，地域における保育施設で保育英語のニーズが高まっていることに着目した。そこで，就職を確実にするものとして，保育英語検定の保持が有効性をもつことを指摘した。さらに，保育英語検定が，単なる英語学習の成果を判断するものではなく，教える側の英語力を図るものであることを評価している。その他の検定資格として，正司他（2012）が，保育技能検定の意義と可能性について考察している。

いずれの研究も，保育現場のニーズの高まりから，資格取得の意義や有用性を指摘するに留まり，主免許資格や授業内容に，どのように活かされるかという視点が欠けている。また，資

格取得において、どのような事前後の指導をしているかも、あまりみえない。

そこで、本稿は、資格取得を活かすため、どのように授業内容との関係性を組み入れることが望ましいか明らかにする。具体的には、「こども環境管理士」資格¹⁾を題材として、関連授業として保育内容環境（保育者養成課程）と生活科指導法（小学校教員養成課程）を事例とし、資格取得を活かすための授業開発を行う。

なお、「こども環境管理士」資格に関する資料・情報は、2015年度の受験生の本学関係者²⁾より得たものである。

Ⅱ 資格の特色と関係性の課題

1 主免許資格との違い

保育士資格、幼稚園・小学校教諭教員免許状の取得には、法律に定めた教育内容を履修・修得する必要がある。また、保育者・教員養成課程の設置は、文科省の認可を得た学校のみに限られる。履修期間は、例外はあるものの、2年間程度を要する。これらの免許資格は、国家資格の位置付けにある。保育者や教員として勤務する場合、原則、免許資格を保持していなければならない。

資格の取得には、大きく2つの方法がある。1つは、特定の教育内容（授業）を受講し、取得できるもの。2つは、資格試験を受験し、合格することによって取得できるものである。場合によっては、双方を課すこともある。また、資格の段階を、上級、中級、初級や1級、2級といった難易度によって分けていることも多い。これらの資格は、民間団体が管理・運営している場合（民間資格）が少なくない。取得まで要する期間は、概ね短い。勤務する上で資格保持が絶対条件となっていないことが多い。

資格は、主免許資格の保持を前提としたものであり、補完・応用的な役割が強い。

2 授業内容との関係性の課題

授業内容との接続では、以下のような課題が考えられる。保育者・小学校教員養成課程の授業内容と資格内容が、どのように結び付くか、みえにくい。その原因は、どのような学習内容を資格の守備範囲としているか、わかりにくい点にある。例えば、「こども環境管理士」の場合、資格取得を目指す上での教科書がない。学習のポイント、参考書、過去問題は、情報として得られる。重点とする学習内容は予測できても、全体像が明確でない。

基盤となる学習内容の範囲が鮮明でないため、どのような授業内容まで関連がありそうか、判断しにくい。

3 教育・保育現場との関係性の課題

教育・保育現場との接続では、以下のような課題が考えられる。資格取得後、どのように仕事で活かすことができるか、事後指導や研修の類があまりない。その原因は、資格取得するま

でを、目的としていることにある。就職活動の際、資格を保持していることを伝えることはできる。他方、その資格の保持によって、どのような効果をもたらすのか、問われても、応えることができるとは限らない。

保育者や教員として勤務する中で、資格の有用性に気付くことはあろう。ただ、保育・教育業界は、多様な課題が山積しており、多忙化の一途を辿っている。そのような状況下で、教育・保育現場で資格の有用性に気付くことは、より難しい。

Ⅲ 「こども環境管理士」資格学習に関する位置付けと可能性

本章では、保育者・小学校教員養成課程における「こども環境管理士」資格学習の目的・構造と可能性について述べる。

1 資格学習の目的と構造

「こども環境管理士」資格は、大きく2つの学習内容を基本とする。1つは、環境問題に関する内容、2つは、生活・自然体験に関する内容である。筆者は、養成校の教育課程の中で、環境問題に関する内容を関連学習、生活・自然体験に関する内容を応用・発展学習と位置付け、資格受験を1年生に取り組みさせた(図1)。

生活・自然体験に関する内容の場合、保育内容(環境・健康など)や教科に関する内容(生活科・理科など)を多く含む。本来、これらの授業の履修中・後に資格受験することが望ましい。他方、環境問題に関する内容の場合、関連する授業が少ない。理科、社会科、家庭科では、部分的に扱うものの、重点的に取り上げることは難しい。

学習過程として、環境問題に関する内容は、関連する授業内容の前に位置付けた。環境問題の本質が、まずは重要と考えた。なぜ、生活・自然体験が重視されるようになったのか、環境

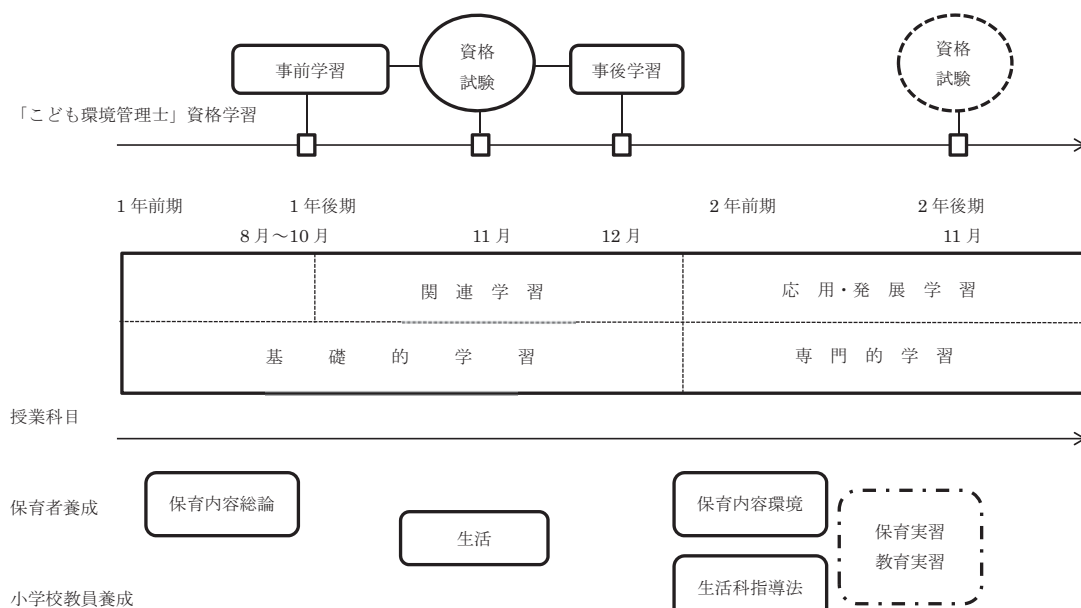


図1 資格学習と関連する授業の過程（構造図）

問題の知識があることで、その意味が、より明確になるだろうと考えた。

続く、関連する授業では、地域性を重視した教材活用を目指す。授業後、教材開発の可能性に気づき、応用・発展学習へ活かすことができるだろうと考えた。その場面とは、教育・保育実習、教育・保育実践演習、現場実践である。

以上から、保育内容や教科に関する内容の授業は、資格取得による関連学習と応用・発展学習で関係性を与えて構造化し、質の高い教育・保育活動を目指す基盤に位置付けた。

2 資格学習の内容と可能性

(1) 事前後学習の内容

資格学習は、受験対策講座の一環として実施した。すでに述べたように、受験対象は1年生のため、資格学習の知識の蓄積がほとんどない。

事前学習は2段階に分けた。最初の段階として、「こども環境管理士」資格が、どのような学習に重点を置いているのか、概要に触れた。具体的には、関連する授業内容の提示と環境問題や法律との関係性について説明した。その上で、学習のポイント資料の配付、参考書の紹介を行い、自己学習（夏季休暇中）の指示を与えた。学習のポイント資料は、①自然生態系、②生態系サービス、③環境問題の本質、④環境問題解決に向けた法律、動向、⑤望ましい生活のあり方、⑥自然体験の意義からなる。

後期に入り、2段階として、過去問題の取り組みと解説を5回実施した。各回は、50分程度で、授業時間外として設定したものである。その方法は、事前に自宅学習として過去問題の予習をした上で、環境問題に関するセレクト問題、生活・自然体験に関するセレクト問題、小論文に関するセレクト問題、模擬総合問題という形ですすめた。セレクト問題は、過去問題の中で頻出度が高いものを選んだ。これは、受験対策であると同時に、資格の重点を理解させる意図もあった。すなわち、頻出度の高い問題は、資格学習の基盤をなすものと考えた。

事前後学習（受験対策講座）は、強制的でなかったものの、1回以上は参加した。むろん、合格させるという点では、受験対策講座のみでは到底不十分であり、自己学習の実施状況が大きく影響する。

事後学習では、解答の自己分析を行い、続いて資格学習の活用の可能性を思考させた。さらに、関連する授業内容を示しながら、資格学習との関係性を確認した。よって、資格取得を通じて、どのような学習を行い、それがどのようにつながりそうか、気付かせることを重視した。

(2) 資格学習の活用の可能性

本節では、事後アンケート結果（2015年12月実施）を手がかりに、受験状況と活用の可能性について明らかにする。受験者の就職希望は、保育者69%、小学校教員20%、それ以外の職種11%であった。次に、受験勉強時間の状況（3段階評価）は、多い12%、標準65%、少ない23%という結果を得た。その判断として、「標準」を、指示内容をすべて実施した場合と考え、

記入させた。

続いて、試験の自己採点（3段階評価）は、以下のような結果を得た。環境問題に関する内容（問題1～15）の場合、高値がなく、中値82％、低値18％であった。自然・生活体験に関する内容（問題16以降）の場合、高値3％、中値82％、低値15％であった。小論文の内容は、高値20％、中値59％、低値21％であった。高値の判断は、自己採点5割以上正解したと考えられる場合、記入するよう指示した。最後に、資格学習が、目指す仕事（保育者・小学校教員）に少しでも活かすことができるか尋ねた（3段階評価）。その結果、高値59％、中値38％、低値3％であった。

以上から、試験結果は、相対的に低値を示し、難易度は高かったものと推測できる。中でも、環境問題に関する内容は、とくに難しかったものと判断できる。一方、資格学習の活用の可能性は、高い評価を得た。受験者は、資格学習と目指す仕事（保育者・小学校教員）のつながりをイメージすることはできた。以下では、中値以上の評価した理由例を示す。

高値の評価理由の場合、環境に関する意識改革（理由1・2）や知識・技能の獲得（理由4・5）について、有用性を実感したものと考えられる。また、理由3のように、保育現場のニーズが高いことが、活用の評価に結び付いた事例もあった。

他方、中値の評価理由の場合、具体的な活用が抽象的・限定的であった。そのことが、評価の判断に影響を与えたものと考えられる。

表1 資格学習の活用の可能性（評価理由の一部）

高値の評価した理由
理由1 「自然を壊さない、傷つけない」を前提のもと、外での様々な活動ができるので、新たな感性が広がる。
理由2 生態系等を理解する事で、様々な子どもの質問に答えられる。遊びでは、よく自然環境を使いますが、その恵みに感謝し、大切に関われるようより意識したいと思えるようになった。
理由3 戸外遊び等では、環境に深く関わる中で、自然環境に重点をおく園が多いため。
理由4 どのようなことが「危険か」ということが判断できるようになった。
理由5 子どもに対しての対応の仕方がわかり、子どもにもその知識を教えることができるから。
中値の評価した理由
理由6 危険な動植物の知識について知ることができる。ただ、業務全般としては、活かす内容が限定されと思った。
理由7 自然に目を向けさせることを意識できる。具体的にどう継続して学習していくか、考えるきっかけになった。
理由8 何も知らなかった「ビオトープ」の知識を得ることができた。

理由 9

環境構成の大切さについて知ることができた。

資料) 事後アンケートの結果。

注) 一部内容は、原文の意味が変わらないよう表現を修正した。

Ⅳ 授 業 開 発

「こども環境管理士」資格を管理・運営する公益財団法人の日本生態系協会では、合格者用（未受験者を含む）の学習資料として、地域における自然的事象を区別できる知識を重視している。具体的には、「自然のもの」は、地域にもともとある在来種、「自然でないもの」は、外来種、飼育動物、園芸種・農作物に分けた。

授業開発は、上記の視点を重視しながら、全体の授業目標・構造、本時の目標、本時の展開、本時の評価の順で示す。また、授業構想（本時の展開）では、双方の授業形態（アクティブ・ラーニング）の導入を意識した。今回、身近な地域における自然物の活用について、どのような支援・指導ができるかを思考させる。その支援・指導のあり方は、多様性があるものと考えられる。個人の考えをいくつか発表することで、多様な支援・指導のあり方の可能性に気付くことができるかもしれない。

具体的には、学習課題を設定し、中心発問から個人の考えを思考させ、発表共有を行う。その際、他の考えに触れることによって、個人の考えを再構成する機会が生じる。最後に教員からの補足説明を行い、授業でわかったことを記入させる。その記述内容から、授業の中心的内容の理解度について判断するといった流れである。

1 保育内容環境の授業構想

すでに述べたように、保育内容環境は、保育者養成課程の授業内容である。授業内容は、幼稚園教育要領「環境」、保育所保育指針「環境」、幼保連携型認定こども園教育・保育要領「環境」に関する指導のあり方である。具体的な内容は、11～12項目示されている。その中に、「季節や人間生活に変化があることに気付く」がある。今回の授業構想は、この内容項目に関係するものを例示する。

○授業目標（全体）

- 1 幼稚園教育要領「環境」ほかのねらい、内容（取扱いを含む）を理解できる
- 2 内容項目について具体的な指導のあり方を思考し、理解できる
- 3 内容項目の指導のあり方を再構成しながら、発展的な工夫・改善について思考できる

○全体構造の概要（全15回授業）

【第1段階】 基本的学習 第1～第3回	【主な授業内容】 幼稚園教育要領「環境」ほかのねらい、内容、改訂点の理解 例：社会的背景・現場ニーズを含めたねらい・内容の理解
---------------------------	---

【第2段階】 中心的学习 第4～第13回 (いずれかの回＝本時)	【主な授業内容】 内容項目(1～11/12)における指導のあり方の理解 例：場面設定課題の実施と発表共有
【第3段階】 確認・発展学习 第14～第15回	【主な授業内容】 各回の授業内容の重点整理と確認・応用 例：他の学習内容との関係性への気づき

●本時のねらい

- 1 四季(春・夏)に応じて北海道地域に植生するいくつかの自然物を思考・認識できる
- 2 園外活動(散歩・遠足など)において、1の自然物を活用しながら、興味関心を高める適切な支援のあり方について思考・理解できる

●本時の展開

	主な学習活動	学生に身に付けたい知識
導入 15分	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の復習 ・本時の内容と到達目標を提示 【発問】 北海道の在来種(自然物)を3つ考えてみよう	授業終了時での思考・理解の内容をイメージできる。 身近な自然物(植物)から、いくつかの在来種を挙げることができる
展開 60分	学習課題 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 在来種の季節変化を意識しながら、園外活動時(散歩)において興味関心を高めるためには、どのような支援が必要か </div>	
学習活動 1	【発問】 発問1の成果の中で、春季や夏季をイメージしやすい自然物を挙げてみよう 「発表共有」	
学習活動 2	【発問】 春季の自然物の場合、どのような支援のあり方(散歩時の声掛け)があるか考えてみよう 「発表共有」	開花時期や植物の色等を中心として春季や夏季をイメージできるものに選択・区別できる
学習活動 3	【発問】 夏季の自然物の場合、どのような支援のあり方(散歩時の声掛け)があるか考えてみよう 「発表共有」	安全確保した上で、発達段階に応じて、興味関心を高める声掛けを思考することができる。他の知識をもとに再構成ができる。とくに春から夏の移り変わりについても着目できる。
まとめ 15分	【説明】 身近な地域には、自然なものと自然でないものが混在している。自然でないものは、身近な地域環境を破壊していく場合がある。よって、自然なもの(在来種)を活用することが、環境保全の意識を高めることにもつながる。 【指示】 本時でわかったことを作業プリントに書くこと。	身近な地域の自然物を適切に活用することが、環境保全の意識を高めることにつながることを理解できる。よって、保育者として、積極的に在来種を活用することが、望ましいことを理解できる。 本時の学習の重点について、しっかりと理解できている。

●本時の評価（記述内容における評価基準）

- 1 春季や夏季において、いくつかの在来種の変化（色や開花など）について理解できたか
- 2 年齢や集団規模，時期・時間といった諸条件を考慮に入れて，保育者としての支援のあり方（事前指導を含む）を理解できたか

2 生活科指導法の授業構想

すでに述べたように，生活科指導法は，小学校教員養成課程の授業内容である。授業内容は，小学校学習指導要領生活編の内容に関する指導のあり方である。具体的な内容は，9項目示されている。その中に，「地域と生活」「季節の変化と生活」がある。今回の授業構想は，これらの内容項目に関係するものを例示する。

○授業目標（全体）

- 1 小学校学習指導要領生活編の目標，内容（取扱いを含む）を理解できる
- 2 内容項目について具体的な指導のあり方を思考し，理解できる
- 3 内容項目の指導のあり方を再構成しながら，発展的な工夫・改善について思考できる

○全体構造の概要（全15回授業）

【第1段階】 基本的学習 第1～第3回	【主な授業内容】 小学校学習指導要領生活編の目標，内容，改訂点，課題の理解 例：現状の課題をふまえた内容の理解
【第2段階】 中心的学習 第4～第13回 (いずれかの回＝本時)	【主な授業内容】 内容項目（9）における指導のあり方の理解 例：指導工夫の思考と発表共有
【第3段階】 確認・発展学習 第14～第15回	【主な授業内容】 各回の授業内容の重点整理と確認・応用 例：他教科等との関係性への気付き

●本時のねらい

- 1 冬季における足跡（小動物）を活用して，身近な地域にどのような小動物が生息しているか，理解することができる
- 2 1の成果をもとに，在来種と外来種の混在を想定し，区別することができる
- 3 小動物の足跡を活用して，興味関心を高める適切な指導のあり方について思考・理解することができる

●本時の展開

	主な学習活動	学生に身に付けたい知識
導入 15分	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の復習 ・本時の内容と到達目標を提示 【発問】 北海道の在来種（動物）を3つ挙げてみよう	授業終了時での思考・理解の内容をイメージできる。 代表的な在来種を挙げることができる
展開 60分 学習活動 1	学習課題 <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; text-align: center;"> 在・外来種の違いをふまえ、身近な地域の小動物に対する 興味関心を高めるためには、どのような指導法があるか </div>	
学習活動 2	【発問】 エゾリス・エゾタヌキなどの足跡（画像資料）をみせ、どのような動物か考えてみよう 「発表共有」 【発問】 在来種の足跡（画像資料）をみせ、どのような動物か考えてみよう 「発表共有」	足跡の違いから、どの動物のものか、理解でき、活動時間についても推測できる。 足跡の違いから、どの動物のものか、理解でき、活動時間についても推測できる。
学習活動 3	【発問】 学習活動1・2の成果をふまえ、どのような声掛け（室内）ができるか、児童の発言予測を含め考えてみよう 「発表共有」	発達段階に応じて、興味関心を高める声掛けを思考することができる。とくに大きさ、形、間隔などの違いに着目できる。 他の知識をもとに再構成ができる。
まとめ 15分	【説明】 身近な地域（冬季）には、日中、動物の姿を確認することが難しい。一方、足跡を活用することで、身近な地域にどのような小動物が生息しているのか、判断できる。ただ、外来種は、在来種の生息を脅かすものであることにも十分留意したい。 【指示】 本時でわかったことを作業プリントに書くこと。	身近な地域（冬季）に、どのような小動物が生息しているのか、足跡を活用しての適切な指導法について認識できる。また、外来種が、在来種の生息を脅かし続けていることも認識できる。よって、教員として、在・外来種の区別をしつつ、足跡を活用することが、望ましいことを理解できる。 本時の学習の重点について、しっかりと理解できている。

●本時の評価（記述内容における評価基準）

- 1 北海道に生息する代表的な在来種の足跡について、理解することができたか
- 2 北海道に生息する代表的な外来種の足跡について、在来種との比較を通じて区別することができたか
- 3 校内外に関係なく、小動物の足跡を活用して、適切な指導のあり方を理解することができたか

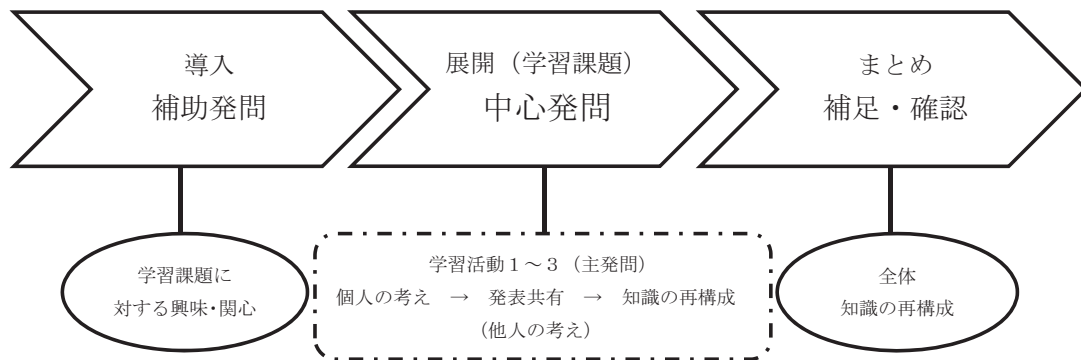


図2 授業展開におけるアクティブ・ラーニングの構造（保育内容環境・生活科指導法）

注）一点鎖線の部分（学習活動）が、教員と受講者、受講者同士による双方向の発問・発言、情報交流の場面

3 授業開発の意義

これまでの保育内容環境や生活科指導法の授業では、身近な地域の自然物（植物・小動物）を事例としながら、それに応じた支援・指導のあり方を思考・理解させる展開を主としてきた。学生は、身近な地域に、どのような動植物が生息しているか気付き、興味関心を高める手法として、自然観察、イラスト・画像などの活用があることを理解していく。

一方、これらの授業は、外来種が存在によって環境破壊が引き起こされることを、理解させることができない。その補完に、資格学習の内容が役立つ。

今回の授業構想の場合、身近な地域の動植物には、在来種と外来種が混在している事実を理解させる。その上で、外来種が存在が天敵となり、在来種の生息を脅かしていることに気付かせようとした。最終的には、生態系のバランスが崩れることで、環境問題・破壊が深刻化していることへの理解につなげたい。

例えば、関連学習（資格学習）には、外来種の持ち込みを制限する法律などの内容を含む。環境に関する法律の知識があれば、今回の授業構想において、その必要とする意味に気付くことができるであろう。

V お わ り に

最初でも述べたように、本稿の目的は、資格取得を活かすため、どのように授業内容との関係性を組み入れるべきか明らかにすることであった。そのため、「こども環境管理士」資格を題材とし、関連ある授業内容として保育内容環境と生活科指導法を選び授業開発を行った。以下では、授業開発の成果を中心として、どのような新規性と有効性を生み、どのような課題が残されたか述べる。

新規性は、資格学習の知識（こども環境管理士）を活かすため、関連学習と応用・発展学習に分け、その間を結ぶものとして、関連する授業内容（保育内容環境・生活科指導法）を組み入れ構造化した点である。結果、資格取得だけが、目的とはならず、学習内容を効果的に活かす仕組みに近づけることができた。

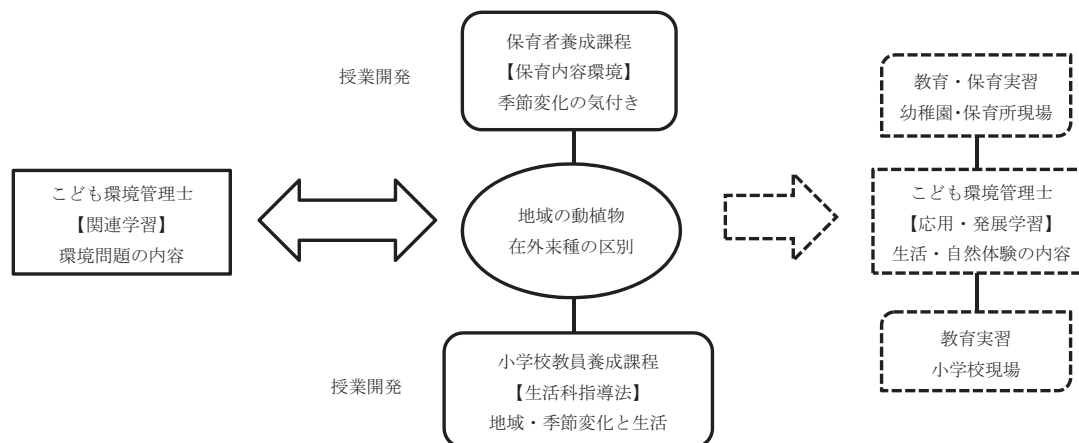


図3 資格学習と授業開発との関係性（学習構造）

注）実線枠は、本論文に関する内容。矢印（実線）は、資格学習と関連する授業内容との相互補完（知識理解の再構成）の関係を表している。

有効性は、資格学習における知識を、関連する授業内容に意図をもって導入できた点である。多くの授業は、既存の授業内容をふまえている。他方、その授業間においてどのようなつながりや関係性があるのか、示されるとは限らない。資格学習とのつながりやその関係性になると、もっと難しい。このようなつながりや関係性の気付きは、受講者に任されている。よって、従来とは異なり、資格学習における知識を意図的に授業内容へ導入することで、資格学習との関係性を確認することができる。

今後の課題は、資格学習と授業内容との関係性をより強化することである。例えば、他の授業内容（例：社会科指導法や保育内容健康）との関係性、他の内容項目との関係性を明確にした授業開発を蓄積していく必要がある。多様な関係性を築くことで、付加価値が増し、より質の高い教育・保育活動となるだろう。また、応用・発展学習との関係性をつなぐ授業開発は、示していない。その解決として、復習課題の提示という方法が考えられる。すでに述べたように、応用・発展学習は、生活・自然体験に関する内容として位置付けた。地域教材を活用する支援や指導のあり方を課題とした場合、多様な成果を期待できる。その中に、生活・自然体験に関する内容を含む成果が、出現するかもしれない。さらに、復習課題に、資格学習の知識を活かす条件を入れれば、より確実となる。

注

- 1) 公益財団法人日本生態系協会が実施する資格で、2級と1級がある。筆記試験は、択一問題と小論文からなる。1級の場合、口述試験がある（筆記試験合格者のみ）。なお、1級受験には、実務経験を必要とする。
- 2) 本学関係出願者44名、受験者42名、合格者（2級）15名。

文 献

正司 好・栗本浩二・落合知美他（2012）：保育者養成課程における保育技能検定の取り組みの意義と可能性について，研究紀要第10号，pp.1-26.

鈴木克義（2012）：子ども英語から保育英語へー「保育英語検定」導入の背景と今後の保育者養成，常葉学園短期大学紀要第43号，pp.107-114.

渡 慶次（2015）：保育検定についての一考察ー短大児童教育学科・学生の保育英語検定の結果分析，沖縄女子短期大学紀要第28号，pp.85-108.

文部科学省（2008）：『幼稚園教育要領解説』フレーベル館.

文部科学省（2008）：『小学校学習指導要領解説生活編』日本文教出版.